

東アジア盤上遊戯史研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 康二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19711

2017年1月27日

「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員 (主査) 文学部 専任教授

氏名 佐々木 憲一 (印)

(副査) 文学部 専任教授

氏名 石川 日出志 (印)

(副査) 大阪商業大学 学長・教授

氏名 谷岡 一郎 (印)

- 1 論文提出者 清水 康二
- 2 論文題名 東アジア盤上遊戯史研究
(英文題) A Historical Study of Board Games in East Asia
- 3 論文の構成
 - 第I章 序論
 - 第1節 東アジアにおける盤上遊戯の概観と研究目的
 - 第II章 将棋研究史とその課題
 - 第1節 将棋史研究と旧興福寺駒の出土
 - 第2節 東南アジア伝來說と初期遊戯者
 - 第3節 将棋の「公権力創造改変説」批判
 - 第III章 古代の将棋と関連する将棋類
 - 第1節 出土遺跡から見た古代の将棋
 - 第2節 宋代象将棋とその性格
 - 第3節 チャンギの歴史的位罫
 - 第4節 マックルック駒と東南アジア伝來說
 - 第IV章 将棋の伝来と日本化
 - 第1節 将棋の伝来年代と系譜
 - 第2節 将棋の日本化と僧侶
 - 第V章 盤上遊戯の変遷と伝播
 - 第1節 六博の変遷と地域性

第2節 鏡と六博

第3節 六博とユンノリの系譜

第4節 雙六の伝来経路に関する再検討

第5節 囲碁の変遷と伝播

第VI章 結語

第1節 東アジアの盤上遊戯の性格と特質

4 論文の概要

第I章「序論」では、東アジアの主要な盤上遊戯である将棋類、雙六類、囲碁、六博を概観し、筆者が明らかにしようとする研究目的・課題を明示する。すなわち、①それら盤上遊戯の成立年代や伝来年代、②それらの伝来経路、③それらの形態変化、④各時代における遊戯者層、⑤それらの成立や改変の原因、⑥盤上遊戯と宗教、呪術的使用の関係、⑦広く伝播する盤上遊戯とそうでないものの違い、である。

第II章「将棋研究史とその課題」は、11世紀後半に比定できる将棋の駒の清水自身による1993年の発掘成果を起点とする。その成果とは、その年代のほかに、成駒反転ルールがすでに存在し、「38枚制酔象将棋」が存在していた可能性が出てきたことである。次に、将棋史にかんする種々の文献を紹介する。そして、将棋の日本への伝来時期に関して10世紀後半と主張する増川宏一と6～7世紀と主張する木村義徳との間の論争をまとめ、増川説を支持する（目的①）。また伝来年代論争が未解決の背景として、東南アジア伝來說に触れ、その前提となっている「庶民が初期の遊戯者」というドグマを否定し、僧侶などの識字層こそが初期の遊戯者と断定する（目的②）。さらに「将棋は平安時代の一条院の宮廷で創作された」という説を、先行研究の誤読・誤認を指摘しつつ否定する（目的⑤）。

第III章「古代の将棋と関連する将棋類」では、まず、考古学的に発掘された平安時代・南北朝時代の将棋の駒すべてを概観する。それらは文字駒、五角形であり、また平安時代の出土例が城柵、官衙、寺院、離宮遺跡からである。奈良時代の立像形の（つまり、文字が読めない庶民が使うような）将棋駒が今後発見される可能性がないわけではないが、極めて小さい（目的①と④）。次に、中国宋時代の象棋駒を、材質、文字の形状（陰刻・陽刻・文字の書き込み）、穿孔の有無、出土遺構に分けて検討する。その内、穿孔のある青銅製の駒は窖蔵遺構でしか検出されないことから、晩唐の「岑順」の物語を参照し、本来の遊戯具としての機能以外に辟邪の目的もあったと推測する（目的①と⑥）。さらに、高麗時代に遡る文献史料のない韓半島のチャンギを検討し、13世紀後半の馬渡3号船の石製駒46点の出土と、中国元代に成立した「河界」がチャンギの盤には存在しないことから、象棋の韓半島への伝来は12世紀前半から13世紀中葉を下限とする（目的①）。最後に、将棋東南アジア伝來說を検証するため、タイのマックルックに用いられる駒を検討する。ブリラム駒の四角形ピア駒候補1点の例外を除き、15～16世紀のマックルック駒は立像であるため形態的に成駒反転が不可能である。また、中国の象棋駒は形態的に反転が可能であるが、成駒反転しない。したがって、東南アジア伝來說が成立する可能性は低いとする（目的①と②）。

第IV章「将棋の伝来と日本化」は、前章とは違って、文献史料から将棋の伝来時期に迫る。中国では9世紀前半の「岑順」の物語に象棋が明確に記されており、この時期には象棋が流

行していたことがわかるので、伝来時期は早くても 8 世紀後半と想定する。日本列島へは 11 世紀中頃の『新猿楽記』があることから 10 世紀後半～11 世紀前半に中国から伝来したと考えた（目的①と②）。伝来時の将棋を次のように想定する。①「銀」「桂」「香」相当の弱い駒の動き、②駒を升内に配置、③文字駒・平板形駒、④「歩兵」相当駒の 3 段目配置、⑤1 列目と 3 列目の駒は 9 枚、⑥取り捨て法（目的③）。

次に、上記の時期に入宋した僧侶が将棋を日本に紹介し、将棋の日本化についても当時の僧侶たちが大きな影響を与えた可能性を主張する。その根拠として、まず将棋駒の名称の「玉」「金」「銀」「桂」「香」が仏教でいう五宝や七宝の内から選ばれた可能性があり、また仏舎利納入時の入れ子状容器や釈迦入滅時の四重棺の仏伝に由来すると考えられることである。さらに、現行将棋にはないが興福寺出土の習書木簡に「酔像」の駒名があって、それは「酔象調伏」の仏伝にも関係するが、「象」ではなく「像」であることから、入宋僧裔然が将来した京都嵯峨野清凉寺に安置されている釈迦瑞像から取られたものと想定する（目的⑤と⑥）。

第 V 章「盤上遊戯の変遷と伝播」では六博と雙六類、囲碁の変遷と伝播を中心に検討し、六博類に含まれると清水が判断した檮蒲とかりうち、ユンノリにも触れている。まず、中国戦国時代中期～後漢代の、墳墓に副葬される実物の六博具、副葬用の明器、画像石といった考古資料を確認できる六博、特に博具の中でも属性が多様で型式変化がわかる博局を検討する。博局を 12 型式に分類し、それらの時間的変遷を追った上、地域的な分布の差を抽出したところ、一部の型式は地域性を持っていることを明らかにする（目的①）。

次に、方格規矩文と六博の関係について論じる。博局の型式変化によれば、最古段階の紀城型（戦国中期）には方格文は存在せず、3 段階目の中山 II 型（戦国後期～末）で初めて方格規矩文が出現することから、方格規矩文は博局文から生じたものとする。また方格規矩文が描かれることのある蟠螭文鏡や草葉文鏡には崑崙山のような神聖な山岳を表したとされる文様があって、六博は崑崙山に住むとされる西王母信仰との関連が指摘されていることから、両鏡式は方格規矩文が採用されるにふさわしい鏡であると指摘する（目的⑥）。

続いて、六博、檮蒲、かりうち、ユンノリの系譜関係を検討する。すでに檮蒲とユンノリの親縁性の高いことは先行研究で言われている。加えて、宝子山型六博とユンノリの盤の形状が類似すること、六博・檮蒲・かりうち・ユンノリは棒状賽子を共通して使用すること、六博の衰退時期と檮蒲の諸現時期が一致することを根拠として、清水は、六博が檮蒲・かりうち・ユンノリの先行盤上遊戯と想定する（目的①、②、③）。

さらに、雙六類の伝来経路を検討する。正倉院には 2 面の紫檀木画双六局（A 型）と木画螺鈿雙六局と榧双六局（以上 B 型）の 4 面の雙六盤が収蔵されている。A 型を北方系、B 型を南方系とする先行研究があった。しかし、中央アジアにおいて升目数は異なるものの、B 型雙六盤に類似する遊戯盤が存在すること、タイのサカに使用される雙六盤は、いわゆる北方系の A 型雙六盤であること、B 型雙六盤の成立は、現状では中国において 7 世紀前半には成立していたことが判明していることなどを根拠として、雙六類の東南アジア伝来説の根拠は薄弱であることを示す（目的①、②、③）。

最後に、囲碁の変遷と伝播を考察する。考古学的に知られる中国最古の碁盤は、破片であるが前漢前半のもので、4 星 17 路盤である。盤上遊戯としての囲碁の起源は六博より遅れた。そこから碁盤は 5 星 17 路、5 星 19 路へと中国大陆で変化したと想定する。韓半島北部へは

紀元前1世紀、漢四郡の設置の時に、5星17路盤が伝えられた可能性が高い。韓半島南部へは5世紀頃に南朝から5星17路盤あるいは5星19路盤、あるいはその両方が伝えられたとする。その後、9星19路盤が韓半島で作られ、さらに17星19路盤に改変されたと清水は考える。日本列島へは韓半島から9星19路盤が7世紀頃に伝えられたと想定する。正倉院の17星19路盤（木画紫檀碁局）は韓半島製で、2面の9星19路盤（桑木木画碁局）は韓半島製あるいは国産と考える。また中国からチベットへは5星17路盤が伝えられ、現地で星の3線配置と13星化が行われたとする（目的①、②、③）。

第VI章「結語」では、第II章から第V章の結論を改めて提示し、第I章で掲げた目的①～⑥を達成していることを再確認する。最後に、第V章の各所で触れたことであるが、広く伝播した将棋類や雙六類に比べて囲碁と六博の伝播地域が狭いことについて、清水はその理由を推論する。六博については、それが西王母信仰と結びついていたため、宗教的色彩の薄い囲碁の流行と共に衰退したと推測する。囲碁については、船上では碁石を安定しておくことが難しい、上達するには一定の計算力が必要、といった理由をあげる（目的⑦）。

5 論文の特質

本論文は、将棋に限らず、中国宋代象棋、チャンギ、マックルック、六博、ユンノリ、雙六、囲碁など盤上遊戯全般の歴史を体系的にまとめたもので、少なくとも日本語では遊戯史研究史上初めての業績とあってよい。外国語では、サンスクリット語もできたイギリス人研究者 H. J. R. Murray の *A History of Chess* (1913) と *A History of Board Games Other than Chess* (1951) が知られるのみであり、Murray の研究を含めたとしても、66年ぶりの総合的研究である。

また本論文は、物的資料の詳細な観察を歴史理論にまで高める考古学者が執筆した遊戯史の論文として特筆できる。日本出土の将棋の駒はもちろんのこと、中国宋代の象棋駒とタイの15～16世紀のマックルック駒も、すべてではないものの、実見した上で検討している。例えば、立像形態のマックルック駒は反転できないが、日本の将棋の駒はその平板形ゆえに成駒反転を可能にしているとか、中国の象棋の駒は円形であるのに対し、日本の将棋の駒は五角形であるため、どの方向に攻めているのか方向が明確である（方向をごまかせない）など、言われてみれば当然であるが、重要な視点である。これはほかの将棋史研究者にはできない貢献である。

本論文の7割を占める将棋に限っては、増川宏一と木村義徳の先行研究があるものの、両者は自己の論に固執し過ぎてあまり議論を進展させることはなかった。清水は両者も含めた数多くの先行研究を柔軟かつ客観的に評価し、清水の考えに生かしている。また将棋の日本化において僧侶が果たした役割に関する仮説は非常にユニークであるが説得力がある。前述の考古学的な視点と併せて、将棋史の研究としては最高の論文である。

その他の盤上遊戯に関しては、資料の比較的豊富な六博を除くと、断片的な資料をうまくつなげて、全体的歴史像の提示に成功している。例えば、六博から樗蒲、かりうち、ユンノリへの系譜関係を仮説化したことも、遊戯史研究に大きな貢献である。

6 論文の評価

上記の特質が示すように、本論文は、世界の遊戯史研究において画期を成す論文であり、冒頭で掲げた目的をよく達成していると評価できる。

しかしながら、本論文にはまったく問題がないわけではない。資料的制約から仕方ない部分もあるが、根拠のない仮説もいくつか提示される。例えば、第Ⅴ章第5節「囲碁の変遷と伝播」において、韓国においては9星盤が存在した証拠はない。また碁盤の時間的变化に「200年」と記すが、もっと急激に変化した盤上遊戯の例もあり、200年も根拠がない。その他、仮説であるのに断定的な表現を使う箇所があって、学術論文として惜しまれる。

また逆に、六博と将棋との系譜関係を論じるにあたり、インドのターヤムという盤上遊戯を紹介すれば、清水の仮説を補強できた可能性がある。さらに清水は考古学者であるから、資料が豊富な六博については、考古学的手法をフルに活用して型式分類を行ってもよかったのではないだろうか。つまり、もっと考古学的方法論的貢献があった方がよかった。

しかし、これらはいずれもマイナーであり、本論文の価値を減ずるものではない。考古学的な分析の課題も、本書の体系性を優先させて簡略な記述にせざるを得なかったとも評価できる。いずれにせよ、画期的な論文であることには変わりはない。

7 論文の判定

本学位請求論文は、本学学位規程の手続きに従い、審査委員全員による所定の審査及び試験に合格したので、博士（史学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以 上